大正五年三月

校友會雜誌

滋賀縣立彦根中學校校友會

第二卷第二十三號

校友會雜誌第二卷第二十三號目錄

○講演

○村上教諭滿鮮地方旅行談　二甲　竹村春雄

○御所拜觀の記　二乙　梅原與惣次

○秋日遠足の記　一乙　森　捨三

○論說

○日重　五甲　野瀨澄圓

○德性涵養の必要と飲酒の弊害を論ず　四甲　瀨川幸造

○知己　四乙　田附信二郎

○勅語拜讀所感　二甲　藤井了照

○文苑

○澤田君の死　五甲　仙波健

○琵琶湖一周膝栗毛　五乙　馬場石城

○亡友塚谷川君の柩　四甲　久米建次

○宗教改革とエラスキーダ　四甲　小川桂瑞

○孫仲と光秀　四乙　大鳥居武彥

○林中の煙　四乙　藤本弘治郎

○雲りの日に　四甲　小川桂瑞

○異鄉の友に　四乙　大鳥居武彥

○比叡登山の記　四乙　藤本弘治郎

○近郊の晩秋　三甲　東野亮

○紙屑　三乙　芝井匡道

○敗者の告白　三甲　奥居武一

○賤ヶ岳修學旅行記　三乙　芝井匡道

○安土城址遠足の記

○詩藻

○一月のあゝ日ぐれ　五甲　仙波健

○大正の刻歌　五甲　佐々木正樹

○部報

○學藝部報

○水上部報

○庭球部報

○武術部報

○角力部報

○陸上運動會報

○雜報

○御大典奉賀式の記

○大禮式場拜觀旅行記

○水島櫻居両先生を送る

○村上臼田大槌青木四先生を迎ふ

○日誌摘要

○寄贈雜誌

○編輯余滴

大日本武德會大會競漕

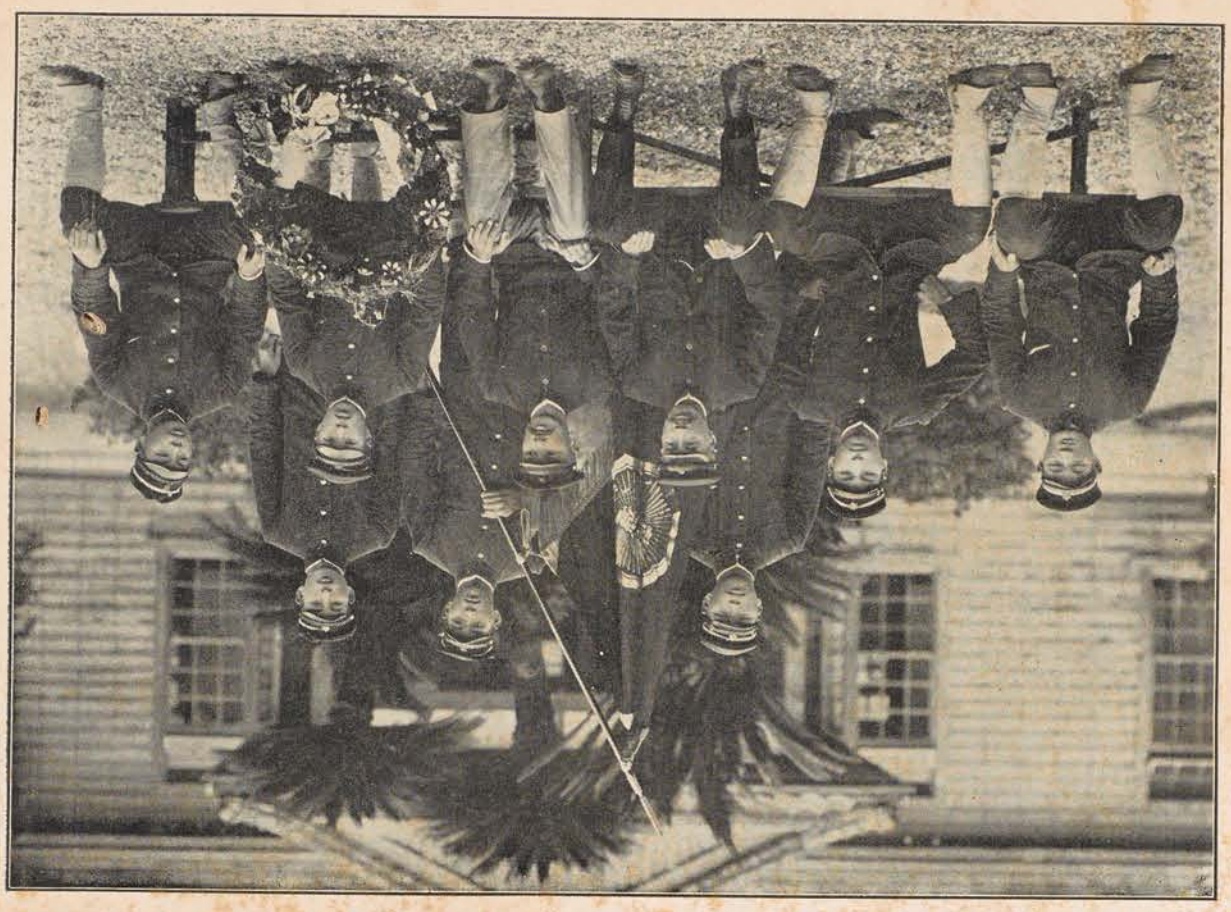
【者勝優會】

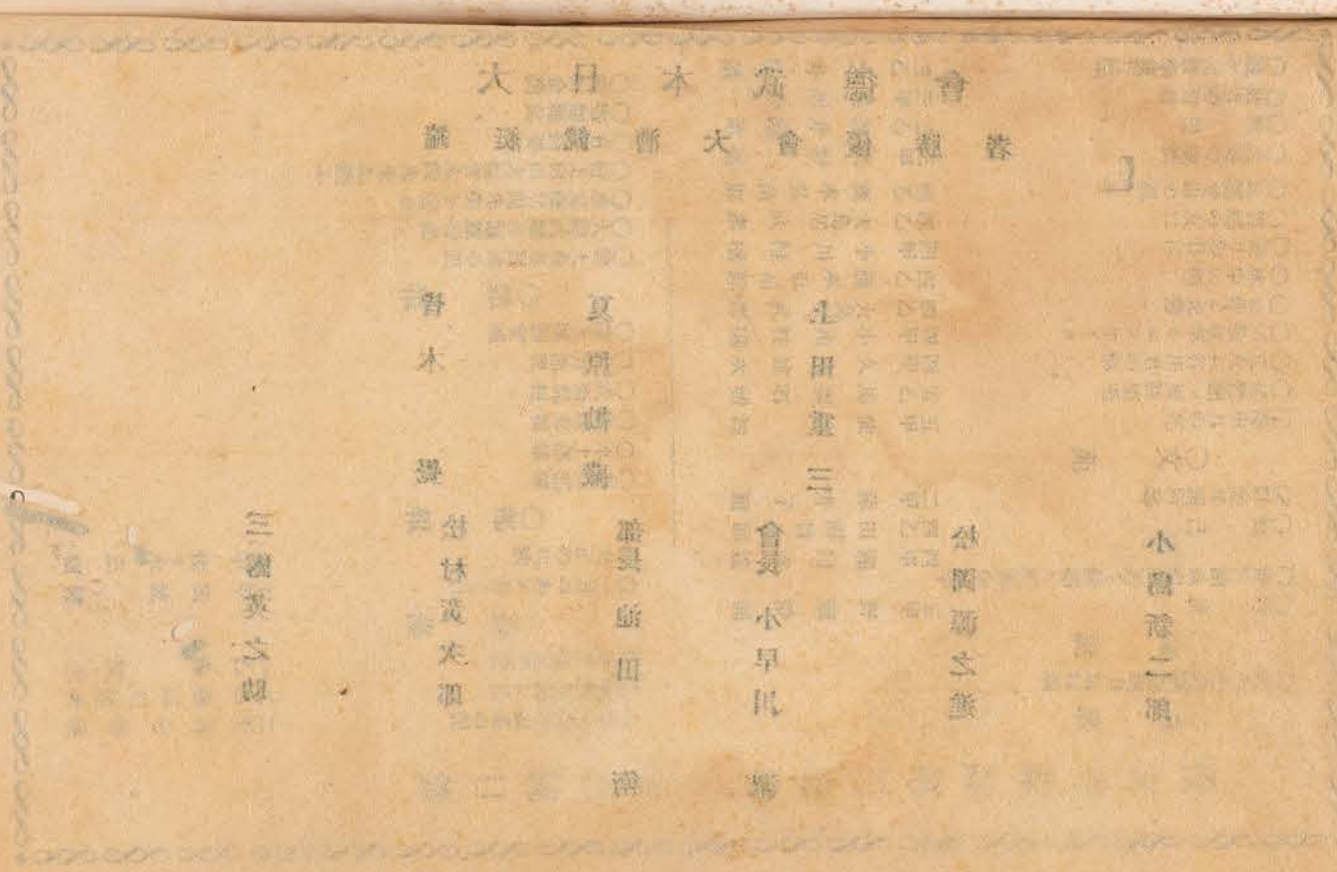
上田重三　　會長　小早川潔

夏原勘藏　　部長　池田衛

書木魁　　松村黃次郎

三隆英之助





大日本帝國憲法發布式

會場

第一圖

小松宮殿下

第二圖

公爵黑田清隆

第三圖

伯爵大隈重信

第四圖

伯爵伊藤博文

第五圖

伯爵土方久元

第六圖

伯爵大木喬任

校友會雜誌　第二卷第二十三號

講演

村上教諭滿鮮地方旅行談

只今ゐー校長殿から御話があつた通り私は此夏滿州朝鮮方面を馳け回つて來たのでありますが僅か往復十七日の間に汽車の方では一千六百哩ばかり汽船では一千海里ばかり馳け回つたのでありますから宛も飛脚の如き旅行で詳細に視察する事が出來なかつた。ほんとの瞥見に過ぎない。徹底した視察談を出來ないのは遺憾ですが極く大体感じた事だけを今日の此の時間を拜借して皆さんに御話したい

一体滿州は日清日露の戰役により澤山なる生靈と非常な費用とを費して今日の結果を得る事が出來たのであり朝鮮の方も多年の辛苦多額の金錢を費して五年ばかり前に併合される事になり丁度今年は五周年に當つて色々の催がありますことは新聞紙上等に於ても色々の記事が出てゐる事で分ります。此うゆう地方は新しい天地として大いに發展しなくてはならないのでありますが此れに先だち更に是を我國民の手に入れたばかり

でなく新しい所に就いて充分なる理解を要するのであります、扨て是の地方の概畧は種々の新聞雜誌にも種々出てをるが尙ほ此上にも充分なる研究を望むのであります、それでこれから御話したいと思ふ大部分に就いては諸君に教室で御話したそれと重複しない方面を話します先づ第一に滿州の氣候を極く大体に御話した

い人々が海外否滿州へ行くと言へば赤道地方或は印度地方とかを旅行する樣に思ひ冬滿州へ行くと言へば南北極に至るかの如く思ひ寒さははげし暑さははげしけれども思ふてをる程暑く寒いのではない、つまり明治廿七八年明治卅七八年戰役に於て火を燒けば煙が上るから敵に見られる野營をする場合に於ては其寒さははげしかつたに違ひないそれで歸つてから話した事が傳つてそう思はれてゐるのでありますが今は寒さに對する設備が出來てをる又夏にしても蔭に入つてをればそれほど暑くない普通の生活をやり普通の旅行をやるにはそれほど苦痛はないと私は感じた併したしかに寒暑の差は烈しい嚴冬の候になれば地下數尺まで凍るまあ寒さは北海道樺太と同しである緯度から言ひますと四十二度か丁度秋田市の南の方仙臺の北の方を通つてる事になりますがあちらの方が少しさむい、けれど寒いといふ事が滿州の農業にはよいので春のはしめ麥を播くそして夏收穫する、又夏になると非常に暑いあちらの暑さは日中に暑いのであつて其前後は涼しい丁度私どもが奉天へ來たとき南滿州敎育會から納涼會の招待を受け大和ホテルの屋上庭園に招れたが其時等は夜の十時頃であつたが大そら涼しくて丁度秋の樣であつたとにかく寒暑の差の烈しいのは此地方の欠點であります、又晝間は暑いにしても木蔭に入れば冷しい滿州では電信柱が一本あれば冷しいと言はれてゐる併し暑いが爲めに滿州の農業が出來るのであつてこういふことが無いと滿州は幾んどとりわがない即ち暑くないと充分收穫を得るといふ事は困難である冬の寒は家の中にあれば幾んど寒さを感じないストーヴは內地の如きものではなくロシヤ式を用ふる事になつてゐる嚴寒の候と雖も其の中は陽春四月の頃の溫さである土人は小さな家にゐましても例の朝鮮の溫突とよく似た設備が出來てゐて滿州では是をヤンと言つてゐて溫突とはやゝ違ひますけれどつまり床下に穴があり一方に於て火をたく、すると煙や炎が床下に廻るそして床は朝鮮のよりも高いがそうゆう風であるから部屋の內は寒くないけれど外は寒いから外へ出て働けないまあ冬は冬籠するより仕方がないそうゆふ譯でありますから家の內に入つてをれば餘り寒くないまあ溫度で言ひますと一年中の平均溫度は大連に於ては日本の秋田と同じ樣な溫度を持つてゐる奉天では日本の札幌と幾んど同じでありますからして先づ滿州の氣候を總合して言へば北海道と同じであるまあ氣候の話はこれ位にしてをきまして私共の行つたのは神戸から汽船に乘り門司に行き大連に着いたのであります着くまでに心配したのは航海中にやられやしないかといふのであつたが左程でもなかつた我々は三等の極く狹い所に入つてをるのであるから苦しいが甲板に出れば涼しい風がそよ〳〵やつて來て暑さも忘れて仕舞ふ途中朝鮮の南で少し風に出合つたがそれ以外に於ては甲板上に於て手紙を書くとかしてゐたそういふ風に風は少しも恐れない寧ろ霧を恐れる六七月の頃には霧か起つてそれで航海の途中で假泊するとかいふ樣な必要があつて下關釜山間の連絡船延着を來すのでありますでそういふ譯で風は無く極めて平凡でありまして吾々の旅行中最も愉快なのは汽船

中でありました汽車に入りますと滿州の汽車は二等へ入るのでありますされど狹くて狹苦しい中へ押込められる樣になりますと益々汽船の上が戀しくなる大連は言ふ迄もなく露西亞が非常な大金をかけて經營した所であつて棧橋の立派な事規模の大なる事は他に於ては見られない又其市街の樣子等は此所で御話しても充分出來ないが着いて第一に感ずる事は棧橋に澤山の支那人の勞働者がついてゐる事で苦力と稱する者は多くは山東省方面から出て來て金がたまると又歸るといふ樣な者で又滿州の一名物である生活が甚だ簡單で一日の生活費が六錢から拾錢までである支那ではマントウといふキビで拵らへた所の饅頭がある是が飯の代になる三つあれば一日の命がつなげるから六錢から八錢拾錢あれば命を繋いで行く事が出來る夜は材木の蔭でごろごろ寢てゐるからこれは只であるこういふ風に生活費が安いからして一日拾五錢貳拾錢三拾錢で働くそれでも一日九錢位殘るそして殘つた錢を貯めて置いて毎日樂しみにしてゐて持つて歸るそれで勞力が非常に安い此所では停車場から何所かへ行くのに拾五錢位とるでせうそれに滿州では任意の所へ行くのに僅か五錢か拾錢で行く勿論ゴム輪ですよ滋賀縣の近江人の會合がありまして其の時宿から車に乘つて行きましたが五錢にまけよと言つたがまけなかつたから七錢とられた其の樣に彼等の勞力は甚だ安いですからして職工を傭ふにしても此の勞力は半分位でやつてゐる或る會社で三千五百八位つかつてゐますが其の半分は苦力を用つてゐるが苦力は一日三拾五錢から四拾錢日本人は七拾錢から八拾錢、支那人を使ふのには手加減はいるけれど支那人を使ふ方が得である日本人か勞力の方で競爭する事は出來ない、大金を儲けでもして濡手で粟といふ樣に行く人があるならばそれは大いに勘ちがい日本人が競爭したりするからして排日を喰つたりするのですけれども今日に於ては餘程困難な事である滿州へ單身行つて儲けるといふ事は少し出來ないそれでありますからしてそれには資本がいる只一攫千金を夢みて飛び出すといふ事は最も危險だ丁度我等が神戸からしてこちらへやつて來る時いろんな話をして夜を過すのであるが其の中に一人の愛知縣の百姓がのつてゐた其の話にこちらに居てはどうも儲らない養蠶をやつてみても儲らないのでこれから鐵嶺へ行くといふと一日六拾錢から貳へる一日貳拾錢くらいつかへば四拾錢殘る一年の間に百五拾圓五年間には五百圓儲かるからと聞いて飛び出したが船に奉天の郵便局にゐた人が乘つてゐて滿州に行つても儲らない事を話してさとして歸らす所だといふことでしたこれは一例ですが無鐵砲に飛び出すといふことは危險だ

滿州の方へ行きまして私等の感ずることは南滿州鐵道會社の勢力の絕大なることです一体南滿州鐵道會社の事業はどういふことをやつてゐるかといひますと民間の人と合同であつて基本金は二億圓民間と政府と各一億圓宛ですが鐵道定期航海旅館の經營、大連には五階の大和ホテル等ありまして方々に於て旅館を經營し電氣をおこして色々の工業につかひ其他瓦斯も經營してゐる又方々に工場を開いていますシャカの工場は其敷地だけでも五十万坪と稱せられてゐる又會社にては皆社員に社宅を貸してゐる日給七拾錢位の者までも社宅にゐます其間に寺もあれば病院學校とあつて宛然一つの町をなしてゐる其他石炭採堀中央試驗場學校病院を經營してゐるその他色々ありますが畧しまして次は旅順此地へ行きますと兩度の苦戰の跡がよく分ります此

地を旅行するにも少しも不便を感せず内地を旅行するのと同じ樣ですがこれも皆兩度の戰に於ける我將士のお蔭で此處に於てその有難さを最も深く感じるのであります

此外旅順の事に付ては色々ありますが此位にして置きまして次に南滿州鐵道に依つて北の方へ行きましたこれは例の日支交渉によつて二千〇二年まで此地方を借る樣になりました此地方は樣子が如何にも大陸的である山があつても東山の樣な傾斜のゆるやかな山である最も有名なのに千山といふのがありますが此外はゆるやかな一望千里といひませうかひろい平野である南の方は高粱は少くて所々にあるばかりでありますが北の方へ行くに從つて段々多くなつて遼陽へ行くと一番多い之は滿州に於ては一番大切なもので食料となり燃料造り燃料とします中には滿州を啓發する爲に高粱を刈らねばならぬといふ人もあるが直ちに是をするといふことは餘程困難であります奉天に行くまでに撫順の炭鑛を見ました是は南滿州鐵道會社の寶庫でありまして大和ホテルの如きでも損をしてゐますが是で儲るのである是れ東洋にても數少く東西十哩南北二哩平均毎年二百万噸づゝ出しても四百年間續く又品質もよく有利である奉天はいふまでもなく滿州全体の大中心で此地で感じたことは女子師範學校附屬小學校を參觀した時万國旗の中に日本のが最も高く揭げてある中に中華民國の國旗はなくて四年前亡びた清の國旗が揭げられてあるこれが我等にとつては痛快である共和政治になつてから英國の公使がある人に共和政治とは何かと尋ねた答に宣統帝が退いて袁帝が即いたことだといつた此地には大いに日本人の新市街が出來てをりこれが將來日本人發展の根元とするでせう

今度は安東線に乘つて滿州平野を見てをりましたが山があつて大分日本風になつてくる内地殊に中國地方に良く似てをる此安東線はやはり今度の交渉に依て二千七年まで借る事になつて終點が即ち安東である發展し始めたのは明治廿七八年戰役の後でありますが注意すべき事は材木を出す事である此の上に大森林がある此森林を日本と支那とが百五十万圓宛資本を出して會社を組織してゐます最も重要な針葉樹は幾ど無盡藏の樣でありますが今後三十位しか無からうと思れるので殖林をしつゝやつてはどうかといふが支那との約束に殖林の事が無いので仕樣がありません

次に朝鮮に入りますと又一層良く内地の風物に出くわす山には松の木等見ゐる事河が流れてる滿州は川と道とは一所であるのですから道らしい道は無い併し朝鮮に入れば川もあれば道もある朝鮮の山には樹木が少い南の方は丁度通つた時は夜行でしたから南の方は云へないされど北の方は禿山はないけれど樹木が少いふ事は溫突を燃くから木を切つてたく殖林を大いに奬勵してわざ〳〵苗木を廻してやつたがそれさへたいてしまつゐといふ事です

支那人は實に穢い非常に臭い不潔である併し朝鮮人は如何にも上品である勞働者でも麻織を着てゐる冠を戴いてゐる婦人等の扇子でも持つてゐる所は如何にも上品に見ゐるからして何だか御つてなつかしい樣に見ゐる朝鮮人は實に可愛い支那人は横面をはつてやりたい併し此所に吾々の注意すべき點がある賴もしくなく點である家康と秀賴と比べると家康は惡しい顏をしてゐるけれど若し彼等を友としたならば賴もしい友となる

秀頼の方は可愛らしいけれども頼もしいといふ點から言へばどうか此と同じ樣に彼等朝鮮人は自分の弟として妹としていかにも可愛い樣であるけれども大日本帝國の臣民としてはどうも弱々しく見ゐるそうゆう感じが第一に感ぜられる最早彼等朝鮮人も同胞である併し乍ら彼等朝鮮人は如何にも頼もしげがない彼等を弟としていくだけの頼もしげがない彼等を如何にも兄として親として是を尊敬して行くといふ風にしなくてはならない然るに日本人は朝鮮人を如何にも侮辱する恁うゆう話がある或る時女子高等師範の人が同窓會があつて朝鮮人の女をつれて京城の郊外を行き農事試驗場へ行つた其所では非常に歡迎して果物をやつたから非常に有難がつてゐた處が歸る途中で酔はらいが來て亂暴を働いたので側で見て居た朝鮮人が意見がましい事を言つたすると酔ぱらひはいきなり朝鮮人をなぐりつけた朝鮮人は逃げ出して自分の村に歸つて十數人がよつて日本人にやつてかゝるといふ大喧嘩が始まつた此の樣に彼等が日本人は有難いといつて感謝して其の心が未だ消ゑない中に亂暴をして千仞の功を一簣に欠いてしまつた長い間の苦心も一日にして水の泡と消ゑてしまつたと殘念がつてゐた恁ういふ點は日本人が大いに注意して兄分として指導してやらなくてはならない京城へ行きますと十二重の大理石で作つた塔があります其の上の方の三重だけとりはづしてある文祿役の時持ち歸らうと思つて三重だけ下したけれども持つて歸れなかつた今未だ下した儘になつてゐる其の時の記念として三重だけ下してあるといふことは彼等を侮辱してゐる風だから上げる方がよいと忠告した

次に小學校を參觀した時小學校の兒童が色々の事をやつて見せてくれた朝鮮人の小供が上つて色々話をした

り歌をうたつたりした彼等は皆うまい殊に日本語がうまい

（以下筆記者澤田君逝去原稿不明につき之を缺く）

論說

自重

五甲　野瀨澄圓

人の人として存在し、世に處するを得るは之れ寔に自重の德を備ふるに依るなり、自重は箇人の基礎にして又國家の生命なりと云ふべし、其れ自らを重んずるとは自己の價値を認め自己の能力を信じ他の價値をも認むるにあり。

一　自重と修養

自重は修養上缺く可らざるものなる事は言を俟たず、自己は道德の主躰なり、苟も德を修めんとするもの自ら重んずる事なくして其實を擧げ得ることやある、されば吾人は自己の所信を守り濫りに他人に屈す可ら

ず、例へば善柔便僻猫の如き人にありては一擧手、一投足、他人の鼻息を窺ひ、權勢ある人を見ては虛禮以て恐々となす、意氣地なき者の甚だしきものなり、或は又黃金の光に眩惑せられ、唯、自己の利せられん事のみを計りて敢て正邪の別を明にせず、或は地位の爲には自己をも犧牲とし、營利の爲には自己をも賣る、此れ現代一般の通性なり、斯くして彼等は遂に自己を破壞せんとす、危い哉

今や文弱の弊は著しくなり、歐米思想の餘流は又襲ひ來り柔弱なる思潮は一般青年の頭腦を浸さんとしつつあり、小說により詩歌により、煩悶戀愛の語句を求めて喜々として、敢て怪まず、借問す、大和丈夫の精を有する男子として恥ぢざる事あるか、現代人士の風を見るに、小說を讀みては自己を忘れ、作中の主人公を懷ひ己れ主人公然となりすまし、或は英雄豪傑の傳を見るも直ちに其人を氣取り敢て其風に習ふ事をせずされば自ら好むで華奢の風を作り或は大言壯語を口にして憚らず、徒に酒色を好みて自を誤り身を失す、此れ皆自重心の缺乏せるのいたす所なり、自重心あるの士は誘惑に對して平然として迷はず、自若として動かず、欲望に誘はれず、名利に惑はず、權勢に怖れず頑として磐石の如く自己の本体を保全す、人は畢竟平等なるものにして人格に於て何等の差別を有せず軒輊を生ぜしは彼等自ら致ししものなり、或書に曰く「天子より以て庶人に至る迄一に是れ皆身を修むるを以て本となす」と宜なり、人の智愚はその人の修德如何によりて別を生ず、自重心は萬德の本源なり、此本源たる德を否認し自己を無にする者、何ぞ能く自己の上に起ち理性的行動を全ふし圓滿に道德を涵養する事を得んや。

二　自重と事業

自重心は修養上必要なると同時に、又事業をなす上に於ても缺く可らざるものなり、世人往々にして事を爲すに當り、一障害に遭へば僻易して再びなす事を望まず「あゝ我れは不適當なり」不能也と嘆聲し、その放棄して敢て顧みず新に他の事業に着手せんと試むる者あり、されど斯る人士は到底他事をも又成す能はざる者なる可し、人世の航路には幾多の障害あり、されば障礙に遭遇すとも泰然自若として更に驚かず恐れず能く事を處するの覺悟なからざる可らず、勇なかる可らず、愼重の態度を以て己れを輕視せず、事に當るの士は當に成功の彼岸に達す可き人なり、古人曰く「失敗は成功の基なり」と蓋し失敗する毎に愼重の態度を構ふるの故なる可し、自重なくして事を成就せんとす、そは宛然舵なくして航海を企つる船に似たり、羅針盤を有せずして萬里の波濤を蹈み破らんとするに等し、斯くて進退を失ひ暗礁に乘り上げ萬事休するに至るべし人にして生存競爭の渦中に入り一方向を定めんには又羅針盤を有せざる可らず、舵機をも要す可きなり、されど吾人はそを他に求む可らず、己れに求む可し、障害に遭遇せば宜しく愼重に構へ斷ず可き事は斷ぜよ輕々に決斷ある可らず、自重の念を忘却せず、この舵機にて事を處せ、斯くせばよしや不幸にして失敗を見るも恨みを遺す事あらざる可し、玆に注意すべきは世人往々事を爲すに當り、己れを賴まずして他人を賴むことあり、己れの進路を舵機に委す、事の達せざるや當然なり。さるにそれをも辨へずして、依賴の達せざる時は失望し却て人を恨む、其愚笑ふ可きなり、かくては業の成る日、計り期す可らず、絕對に不可能事とも云ふ

べし、故に吾人は獨立獨歩決して他人に依賴す可らず、然り社會は或程度迄は共同生活にして相互に救くる者なる可しと雖も、共同すべき資格を有せざるものは容れられざる也、然らば共同すべき資格とは何ぞ、曰く己れ自ら業務を負擔し得可き資格を有する者なり、社會に有用の材となる可き器量を有す可き人なり、換言すれば自己を完全に構成する者の謂なり。

自重心なくして得し成効は砂上の樓閣に似て、一陣の嵐に倒れ、一雨に其基を危す、金殿玉樓に座し酒池肉林の榮華榮耀を極むと雖、朝に食するに一物なく臥するに家なき破目に至る可し、これその成功なるものが恰も水に畫ける如きものなりしが故なり、眞の成効は如斯物にあらず、難攻不落の城廓にして拔かんとして拔けず、動かさんとして動かざるものなり「運を天に委せよ」又曰く「天は自ら助くるものを助く」と、されは吾人の運は吾人自らの心にありと知るべきのみ、故に吾人は須らく自らを信じ自らを恃む可し、依賴心を去り奮然として邁進せよ、障害の下に、成功の門を開くべき秘密の鍵は隱匿せられ居るなり、自棄を止めよ成功の門は汝の前に在り、覺めよ、自らを重せよ而して成功の旗を擧げよ。

三　自重と國家及結論

自重心なきの士は亦國を危くする者なり、忠と云ひ孝と云ふもこれ畢竟ずるに自重心より湧き出づる清泉なり、滴一滴、孝となり忠となる。流れて萬德となる、國民としては道德上の義務たり權利たるものなり、されば君に對しては忠となり國に對しては愛國となる彼の社會主義者の如きは始め國民たるの自重心なき輩也宜しく國民一般に自重の德を養成すべし、是れ國家は自重心ある國民によりて其生命を維持するものなればなり。

以上の所論外に、自重心は人世百般の事柄を處するに當りて、必要なる事論を俟ざれども、要は自己に對し、家族に對し、國家に對し、社會に對し、萬有に對し、其責任を全うするに、其責任の本躰となるべき自己を重んずると共に他をも重んずるに在り、我國古有の武士道の眞髓とも云ふべき智仁勇禮義信の美德はこれ即ち自重心によりて涵養せらるるものと云ふ可し。

德性涵養の必要と飲酒の弊害を論ず

四甲　瀨川幸造

學識よりも才能よりも最も吾人に必要なるは德性涵養なるべし況や今後の社會は學識の競爭にあらずして寧品性の競爭なるに於てをや

維新以來諸外國との交通頻繁にして西歐の文明東漸し吾國の之が影響を蒙るは極めて深甚なり而して今や百般の文物制度則を殆ど彼に取らざるはなし其變化を受けたるや啻に外形上のみに止まらずして精神界にも及びし爲數千年間持續せる社會の形狀頓に一變するに至れり是文化の發達と時勢の推移とに隨伴する流弊にし

て實に避くべからざる現象なり抑々人の德義は生存競爭上に於て須臾も缺くべからざる即ち邦家の隆盛上極めて重大なる關係を有し國民にして德義なくば邦家は忽ち衰亡せんのみ其れ何を以て世界各國に超絶せる國体を無窮に維持するを得んや近時政界の腐敗其極に達し海軍收賄事件近くは大浦内相事件及び乃木家再興問題等紛々として起る其原因一に政界の主腦者たる者の品性の乏しきに依る德性涵養の足らざるに依る彼等は決して吾輩の如き淺學薄識なるものに非ずして非凡の學識を有し絶代の才能を蓄ふる輩なり彼等は單に自己を誤れるのみならず世を害し人を傷ふ是より甚敷はなし他人の膏血を搾取し以て己れが豪遊の費とし敢て恥ぢざるの徒輩近來特に益々多きを見る憂ふべき哉

固有の美習良俗時に破壞され禮節秩序亦破壞せらるは其原因二三にして止まらずと雖も飲酒に基因するは言を俟たずして明なり抑も酒精の身体に如何なる影響あるかは常識ある者の皆知る處なり而して上戸輩は或は云ほん酒は却つて消化力を增進せしめ血液の循環をよくし体溫を良くし寒氣を忘れ精神壯快に鬱を散じ神經を敏ならしめ想像力を强くす

と或は然らん然れ共其害たるや又之に幾倍するものあらん酒毒たるや只に一時の精神上のみならず子孫に遺傳し國家の盛衰に關す即ち酒は生殖力を衰ゑしめて產兒の數を減じ又惡性の子孫を生せしめて人種を劣等ならしむ肺病黴毒淋病其他の傳染病の感受性を增加し又是等の傳染病に對する免疫性を減却し壽命を短縮す家にありては家政を紊亂し外に出ては社會の風俗を壞亂し他人に危害を加へ自殺を促し又軍隊の兵力を薄弱ならしめ國家の防護を危からしむ而も近時は正宗の瓶に正宗なし酒精に防腐劑を混し俄に釀造したる物多きに拘らず尙之を飲まんと欲するは自ら生を短縮する沒常識の行爲ならずして何ぞや

吾人にして前二項の弊根を矯正するにあらざれば前途痛歎に堪へざる物あらんされば如何にして此弊根を矯正し得べきか德性涵養上最も影響を及ぼすものは境遇なり不德行墮落の淵叢とも云ふべき一種不良の境遇にありては如何に高尙なる品性を養はむとするも甲斐なかるべし去れば第一に善良なる境遇を得ざるべからず己に是を得れば次に聖賢の書を熟讀する事最も肝要なり斯くして耳に惡聲を聞かず目に惡風を見ず而して寸暇ある毎に虛心平氣以て千古不易の金言に服膺し孜々として倦まざれば自ら知らず知らずの間に品性も高まり果てば一世の仰望する所と成り己の欲する所に向ひ縱橫無盡猛進するを得べし

第二に是等の向上を妨ぐる飲酒の害毒を自覺し之が禁酒を斷行する事を要す將來社會に活動雄飛して大いに成す所あらむとする青年は深く之を心に銘し實踐躬行の實を擧げざるべからず

知己

四乙　田附信二郎

世知己難を唱ふ、知己とは何ぞや、我の眞意を洞察せる友なり、古今東西を問はず、貴賤貧富を論ぜず、其の人の眞意を知り、其の人のためならば、死すとも辭せざるの人、これ其の人の知己なり。刎頸の交、水魚

の交、管鮑の交と言へる、これ何れも、知己の交のみ

古より、知己なきを悲みて空しく、僻地に憂死する人多し。固より、知己を得るは難し。然れ共、知己は到底求むることをゑざるか

否、知己は、各自努力によりて、必ず得らるゝものなり。努力とは何ぞや、他なし、終始不渝の至誠これなり、至誠は大地をも貫く、之を以て、知己を求む、何ぞ必ずしも至難とせむや。

今の世、道義頽廢して人情紙よりも薄し。平居里巷に相慕悅し、相徵逐し、訒々として強ひて笑語し、以て相取りて下り手を握り、肺肝を出して相示し天日を指し、涕泣して、生死相背負せざるを誓ふ。

而して一旦、小利害毛髮の比の如きに遇ひて、互に反眼し爭鬪す、而して利を得るや、計當れりとて喜び、之を得ざれば天下知己なしとて歎ず、愚なる哉。

至誠にして動かざるものは、古來未だこれあらざるなり。自己の利害を慮らず世の痛罵賞讃を顧みず、唯至誠を以て正々堂々俯仰天地に愧づるなく、人のため、國のため、世のため、盡して終生渝ることなければ、人誰か遂に感ぜざるものあらんや。

その至誠を洞觀し、心を一にして協力益々奮鬪せむとする人は卽ち知己なり、乃ち知己を得たる也。

然れ共、終生の至誠も、遂にその意を悟られずして却て罵倒の中に、終らざるべからざることあるを覺悟せざるべからず、屈原の如きは此ならんか、屈子の至誠忠心は遂に認められずして空しく僻遠に悶死せしかど

もその遺しし一片の離騷は千古に芳しく後世に至り賈生の之を慕ふや切なり。然らば、賈誼は、屈原のためによき知己ならずや。

而して後世、屈子を知る、豈獨り賈生のみならんや。

論して之に至る、未だ至誠ならずして、知己なきを歎ずべからず。至誠を以て知己を得る縱令當世に得ることなくとも、後世必ずこれあらん。嗚呼知己を求むる道唯一の至誠あるのみ。

勅語拜讀所感

二甲　藤井丁照

天佑神助を保有して萬世一系の寶祚を承け給へる　天皇陛下は大正四年十一月十日卽位の大禮を擧げさせ給ひ高御座に昇御して大日本帝國統治の本位につき給ひ詔を萬方に發し給へり、我等恭しく拜誦し奉るに卽位の大禮を行ひて、四海に君臨し給ふ初めに當りて、改めて立國の大本を說き君臣同根の情誼を示し給ふ詔のかしこき今更に感泣せずんばあらず、畏くも宣はく義は卽ち君臣にして情は猶父子の如しと、是れ四民貴賤貧富の論なく六千餘万みな一子に異ならざる思召と拜承し奉る、卽ち　天皇陛下の一視同仁人民と慶福を頒ち給ふ無上の光榮とし永久に聖旨に感荷せずんばあらざるなり、更に聖旨を伺ひ奉るに祖宗の宏謨を重じ益々國家の基をして固からしめんことを宣ふ、皇室の益々尊榮にあらせられ臣民が無限の國恩に浴するを

得るは一に祖宗の德澤によらざるはなし、されば歷世祖宗を尊崇し報本反始の誠を致し給ひ人民も亦よく祖宗を尊崇せり、之れ我が國の美風にして吾人は永く此の美風を失はず祖宗の恩澤を仰ぎて感謝の誠意を致すと共に益々忠良ならんことを深く心がけざるべからず、之れ臣民の祖宗に對し奉るの要道なり抑々我が國は明治維新の盛運を開き給ひしより日進月歩の勢を以て進歩發達し、遂に世界の一大帝國として万邦に冠絕するに至れり、されど我が國の前途は尙多端なり國家の隆昌と共に萬國と關係亦日を追ひて密に將來幾多の難關に處せざる可からず、されば吾人はいよ〳〵國力の充實を計り富國强兵の策を講じ以つてよく皇運を扶翼し奉り聖旨を奉戴して此の難關を突破し倍々國光を發揚するの覺悟なかる可からず。

あゝ吾人生れて此盛なる皇國の人となり無量の皇恩に浴す何の喜か之に如かん、國臣の道を盡して、天皇陛下の大御心にそひ奉り益々わが國の興隆を圖らざるべからず。

澤田君の死

五甲　仙波　健

▲畏友澤田義重君の死が五年級に知れたのは二十二日だつた。此日は私に取つては不幸な日だつた。私の母は實に九年前の今日澤田君と同じ徑路を辿りつゝあつたのだから。

「死」といふいたましい語が私の耳に入つた時。私の總ての感覺は鋭敏になつた。手にした定規を下して一番早くその報を得たk君を見詰めた。今いふが夫は用器畫の時限だ。

「本當？」

私は何うしても現實から澤田君の奪はれた事を信じられなかつたから、かくは問ひ返した。

「誰が嘘をいふもんか」

k君の顔は充血して無念さうな樣子である。

「いつなの」

「昨日」

k君はうなだれて又ひとりごちた。

「かうなると知りや、一度は見舞狀でも出して置くのだつた」

▲十分の休憩時間に於ける五年生の話題はすべて澤田君の死に關するものだつた。誰もかれも幸先多き秀才の死を惜まぬものはなかつた。皆が夢のやうに思ふのも無理はない。現に一週間以前迄は君の溫顏に接する事は出來たものだ。

道場の東側にあの弱い身体をもたらせて日なたぼくりをして居た君は最早此の世の人ではない。

弱い肉体と強い精神とを持つた君の志望は高等學校三部だつた。その實現はあの秀でた頭腦を持つた君に取つて容易であつたに違いない、しかもその實現は永久にこない。

▲ How much more than is necessary do we spend in sleepl forgetting that "the sleeping fox catches no poultry" and that "there" will be sleeping enough in the grave.

このセンテンスは君の死を聞いた日に習つた英語の中にあつたのだ。諸君！最後の一句を御覽なさい。何といふ悲慘な語だらう。しかも君は今 enough sleeping を始めたのだ。永遠に醒め得ない眠である。同時に君の大なる抱負も眠つてしまつた。吾人は悲しまねばならぬ。

▲雜誌部の理事として君と私とは二年間相提携した。君は口數の非常に尠い人だつた。確かに言葉よりは行爲の方が早かつた人に違いない。

諸君は講演のある時に我部の理事が筆記して居るのを御存じだらう。私達はいつもあとで皆のを纒める。そして當に君の分が最も多いのを見た。が君の思想は余り誌上に載つた事はない。要するに內部の人である。

▲或日、それはたしか去年の二月だつたらう。君はいつになく早く歸つた。歸る時私が

「今日はどうしたの」と聞くと

「寄宿舍の卒業生の送別會をするの」

と君は答へた。そして又云ふには

「來年僕等が卒業する時雜誌部でも送別會をして呉れといつたら殘の人達はどんな顏をするだらう」。と。

君の云つて居た卒業は目前に來た。しかも君は永遠に卒業といふものに出遇ぶべき機會を持たぬ。

▲天は吾人から此の秀才を奪つて悠然として居る。吾人は恨みに思ふ。しかし最早何うする事も出來ぬ。神が君の死によつて吾人に與へた敎訓は男らしき諦をなせといふ事ではあるまいか。夫はあまりに殘酷である。だが吾人は之に絕体的服從をせねばなるまい。

悲しみを胸に持つ諸君よ。吾々は諦めませうよ。

琵琶湖一周膝栗毛

其の五日　　五乙　馬場石城

（五、一、二四）

春眠曉を覺えず、九時の鳴る頃まで旅寢の夢を結びつゞけて、千鳥鳴くてふ小松の濱を後に近江路を急ぎし時は十時も過ぎて午に近し。不覺を悔ゆれども術なく、如何にのどけき春の旅とは云へ、その日の豫定もわれば心せかれて、小松に立ちて三尾のみさきに田鶴むれゆくを見渡せし古人の風雅と親まむ心地もせざるなりされどせめては「近江舞子」のみは見物せむものと、牛を引きつれ來かゝる人に「近江舞子の如何方」を問へど「知らぬ」とのみ答へて「近江舞子」てふ名はかつて聞きし事なき樣子にて過ぎ行けり、三八は顏見合せていぶかしながら進むに、道傍に一軒の賤ヶ家あり、門を叩けば主人も相知らずあはれ燈臺の下暗しと落膽して行けば程なく一村里を迎ふ。凧上げ遊ぶ子供に亦もや問ふに「知らぬ」「知らぬ」の一點張「然らば雄松崎は」と問へば「雄松崎なら」と合點せし如くねむごろに敎へけり。されば人々此の邊にて近江舞子と風流振な給ひぞ。

敎へられし道を湖岸に向ひて凡そ八町も進みけむ、小々浪寄する湖岸に出づれば、此所一帶、青松、翠を競ふ、湖の碧砂の白四顧清絕はるか故郷の山々を望めば、長煙一空にたなびきて風爽かなり、をりしも櫓調子そろへて花やかに歌乃の聲高く低く過ぎ行くありて深く旅情を慰む。

子の日して小松か崎をけふ見れは
邊に千代の影そうかめる

小松はをまつ。雄松崎の意ならむ。詠みし人はたしか俊成。されどこの人の住ひ居し昔に比しては松の齡はるか若く思はるるなり。

小松の里を立ちて正に里許再び近江路に出づれば溶湃の瀧の音、かすかに聞ゆ。かくて歩むや早し、三里の道、今堅田に着せむとする時、野路を蹈み分けはしなく勾當の內侍の墓を弔ひぬ。

此所今堅田の村の北端なる原中に、朽ちたる橋を渡りて一祠あり。前に咲く櫻花一株、後には緣繁る松の木の下、自然石に「勾當內侍之墓」と刻され側に加茂某の碑文を記せし石碑ありて內侍が貞烈を語る、內侍は大夫行房が妹にして二八の春の夕べより、後醍醐帝の御側に侍りて內侍をつとめし、世にも稀なる美姫にてありき。或月影清き秋の夜、日頃より愛せし玉琴を彈じけるに、通ふ調べのゆかしさに、たづね來りし新田左中將義貞一度內侍を垣間見てより英雄の心緒、糸と乱れ、糸と乱れし建武の末に、朝敵西海にたゞよひし時、山門臨幸の砌、共に內侍がために、その征路に滯り後の世に武門の恥を殘すぞあはれなる

我袖のなみだにとまるかけとだに

しらで雲井の月やすむらむ

との悲歌は畏くも天聞に達し、有がたき御さとしに、内侍を賜り、とても世にながらふべくもあらぬ身の假の契りや深かりき。されば勝てば官軍敗くれば之れ世は坂本のその森影を今を限りとかへりみて北國越前に落ちむと、此所堅田の濱を舟出する夫婦の哀別、生きて歸る事難き戰の門出、互の心中如何なりしならむ彼の松浦の佐用姫の宮居の船を慕ひわび、領巾振山に石となりし例も今に引く網の、海人の磯屋にかりずまひ思ひ、待つこと三星霜頃は延元三年秋九月中の三日、堅田の浦曲に雁の音づれて文月二日、卅七歳を一期として藤島に露と消へにし夫の最後、聞くや内侍が心も髪もふり乱れ、女心の淺はかに深き堅田の濱に身を投じ義貞が後慕ひて亡せにけり、噫々窈窕たる花の美姫汨羅の鬼と化し今亦さらに野神となりて永眠す、内侍に付きては異說あり。即ち内侍義貞の後をしたひ行き、あはで返りし夫の首の朝敵の最、武敵の雄として、京都のさる獄門の木に懸けられ眼塞り色變せしを見しその夜翠の髪を剃り下し、嵯峨の奥往生院のあたりなる柴の屋に淋しき余生を送りしと。遮莫。我は姫が墓を弔ひ、その墓の守役なる本城善平氏より聞きし言の葉を書き連ねたるものを。氏の外に守役は十數軒有り、かつこの守役祖先傳來なり。毎年九月十三日を紀念にその夜の更けてより、あくる日の曉かけて祭を營み神靈を慰るの古例あり、その夜は村中戸を閉さず磯邊につなく舟だに苫屋をしめざるを例とし、若しさなくしてその祭の特長なる乱暴に逢ふとも自を恨むべきのみと之れなむ内侍の死するにあたりて狂女となり、四方を荒したるを眞似たるなり。

氏をたづねし時、育兒院の石鹼賣と間違へられたる珍談奇談あり。宅を辞し、颯々と吹く松風も姫がかなでし琴の音かと昔戀しく白波寄する濱路を進み行く、ふりさき見れば比良の峯春風未だ江州に來らざる竹外の詩の白雪は一角に消ゑ殘り八景の一たる價値はたしか

雪はるゝ平の貞根の夕暮れは
花の盛りに過るはるかな

の一歌に興味今更に深し、姿ゆかしき比良の美を味ひつついには入りぬ本堅田町、御堂をたづね來れば此所に待つなる友のあり、先づ風流なる樓門をくぐるにその緣起を掲げたり。滿月寺と號す、その他讀むも、もどかしく波打ちぎはに出でゝ思はず「之れが浮御堂か……」と叫びぬ。二間余り湖中に突出せし水榭、閣内に御佛の姿有りがたけに並立するあり、さても名物に甘い物なし。されど四方の眺めはそのかみの歌枕たる面影を存し波路へだつる對岸の木濱は湖形をちぢめ、はるかにかすむ湖東の山影、一碧の波上に白帆の點々たるは

雲のゆく堅田の沖やしくるらむ
やゝかけしめる海人の釣舟

と詠みし人のあり、磯馴松吹く風は袖を飜す、今しも月影高く、金波銀波を遙はし雁がねほになきて渡らむかゞ尙美しの風情を呈すべし。

堅田を後に阪本さして進むに十町の近路を敎ふる人あり、言葉のまゝに畦畔をつたひ近江路に出で眞野の入

江も打過ぎて日吉社に着きにけり、櫻花爛熳、花の下に遊ぶ童に、今を初めの參拜なれば樣子を問へば「案内せう」と共に手を取り、いざなふなり、疋田小野閣下におかせられては、如何に思召し給ひけむ、無料休憩所に腰を下し給ひて共に詣で給ふのけはいなし。されば我は少年の案内に流れも清き石橋を渡り、石段を登り盡せば社務所あり、緣起を尋ね本殿に參拜しぬ。流れさやけき御手洗川の水は神代ながらの聲に檜、松、杉など千歳の綠濃かに茂り合ひて、晝蒼朱棟と相掩映し、雄壯なる甍宇、儼然たる構は、誠や神威高き大神の大御姿と神々しさ限りなし、境内一巡りして元の所に來れば疋田君我を迎ひ出でゝ

「僕は阪本から汽船で歸るから、君は比叡山へ上つてコイ」眼を大に早口にて云ふは例の如し、かねて覺悟はあればさらに驚かず、小野閣下に向ひつゝ

「小野！君はどうする？」

「僕は疋田と共に歸る……君は還るか登る？」

「サー」。……「僕は登る。……では此で別れる、君等も時間の都合もあらうから急ぎ給へ。また歸國の時は逢うて旅行の快談でも致さう」。

「ヂャ、隨分達者でやりたまへ、途中の通信をたのむ」。

「さらば」

「失敬」。「さらば」。と袂を別ちぬ。常とても親しき友の別れは心うきに、ましてや此所は旅の空なる日吉神

社の夕まぐれ、二人の姿の後見送れば、二人も心引かれて交る〳〵後をふりかへる。つひに姿は見わずなりぬ、晩鐘の一杵、一しほの淋しさをそへて忙然たる多事。之より親むは只だ七寸の草鞋に一本の杖をたのみて、晝なほ幽境の急坂を宿院さして登り行く一足毎に、日は入りあひの鐘の音たゝて眺め美はし琵琶の湖原もかすみ行き、六里歩み來し旅の身には廿五町さへ汗は瀧とながれあゆぎ〳〵登りて群鳥ねぐらに歸る頃ほひ根本中堂にたどりつき宿院に一夜の宿を乞ひにけり。

鹿尾菜に、薇燒豆腐、精進づくめの膳立も、ひだるい時のあじない物なしに健啖、大いに腹を肥す。雛僧の案内にて一室に陣取る。入浴の進めに應じ歸りて爐邊に暖を取り紀行を調ぶる事やゝ久しかりき。我かねて池寺の最明寺の住職の此所に有るを聞き居しかば、面會を乞ふに「待つて居ますから御出で下さい」との返答を得て訪問しぬ。

「よく御出で下さつた。よう御存じで……あなたは何所から？。」

「私は多賀です。此度旅行するについて、安養寺で、つひあなたの事を聞きましたもむですから」。

「ソレは、ソレは。まアー御あたり下さい。多賀はどちらで。」

「馬場です」。

「ハアー馬場さんの息子さむですか。御祖父さんは御達者ですか」。

「ハーア御かげ樣で」。

「あなた御一人で」

「けふまで三人で五日の間やつて來ましたのですが日吉さんから二人は歸つてしまひましたから……イーエ家の都合があつて……それで私一人になつた樣な次第です」。

「此所へはあなたは初めてですか」。

「そうで御座います、聞いて居たわり程にはなかつたです」。話の進むにつれて質問は乱射するに至れり。

開山最澄の生涯。怪僧辨慶の生ひ立ち。或は加茂の水と共に法皇の御心を惱まし奉りては參與の權を振ひ、戰國時代に有りては諸英雄と鎬をけづり僧兵さては謠曲、太平記と僧の手に成りし書にまで及びて、ちまりの面白さに旅のつかれも、夜の更け行くも知らざりき。されどいつか眠けを催しければ室を辞し、明朝四時を期して四明ヶ嶽に朝日の美を味はむ事を雛僧と約して草の枕に着きにけり。

其の六日

曉告ぐる鐘の音に旅寢の夢覺むれば、雨戸を叩く雨の音、「四明の曉」の望は空しくなりぬ。落膽限りなく天を恨みて雨扉を開けば、こは如何に、濛々たる白雲は庭に下りてさなから身は雲上の臺に居るが如し。やがて洗面は終へぬ流石は避暑の地にして春淺しとは云へ寒氣身にしみ入るばかりなり、食事調ひければ諸人に暇を告げ「いでや此より白雲を排して四明ヶ嶽を突破せむ」と草鞋の紐を結びしめ、　櫻の杖を右手に宿院を出立しぬ。

納骨堂までは道は廣きもこれより奥は道のそれらしきものなし、四方に氣を配れば堂の右に人の通ひしあ跡りて後の森に入らむとする所に木片に「四明嶽に通ず」とあり、されどあまりにあやしきまゝに、堂のかたはらの一構に人の住むけはひせしかば、門を叩きて尋ぬれば障子隔だてゝ「ハイ行けます」の一言のみ。深山の奥にて雲に迷ふ旅人には此の僧の答へはあまり無情に感じけり。麓に待つ母峯にただぬる父のある石童丸にはあらざるも、心細道分けながら數町も進みけむ林の木立はたゐて、短草ばかりの所に來ぬ。白雲益々濃咫尺を辨せぬ境に立てる此の時の感は、只だ經驗ある人の推察に委ぬるの外なし、我々の日頃伊吹、靈仙さては杉坂に雨の日必ず峯をおほふ白雲の下るを見るべし、その白雲に包まれたるものを、四明の眺望も何のその一歩毎に過ぎし道を見失ふの樣、再び歸り能はざるを恐れて罪とは知りながら、郡林の小松を折りて道しるべとなし、進みては折り、折りては進むにいかに〳〵元來りし道、ついには折りし松も度重りて行くも進むも、五里霧中、東西南北、前後、左右、天上天下、之れ白雲、しばし途方に呉れけるが、ふと思ひ出せしはかつて陸軍紀念日に奥村大佐殿の話されし軍談、實にもと、小松の枝を集むる内、附近に人の捨てし折箱の足元に現れしかば之れ天の恵みと、捨ひ取り、その一片をさしつゝもやうやくにしてその頂上に立ち出でぬ。登りは登りしものゝ只だ登りしとのみにして遙か遠き昔、彼大逆臣平將門の「壯哉、大丈夫、」の眺めを得ざるこそ返す〳〵も遺憾なれ。さはれ此の擧はあへて無駄にもあらざるべし、よし人は匹夫の勇と云はむも、我は此度の旅行談に一つの快擧に數ふるなり、折箱の片をたよりて納骨堂に返りさらに聖地の奥にと

足を向けぬ。つづらをりなる山路をつたひて「大師の御廟」にと來りぬ、門、本堂あり、今、朝の務めにや、讀經の聲と抹香の香高く、ポンポコポンの木魚の音さへ法の響きありて居然仙郷、南氣阿彌陀佛と手を合せさらに道はるかなる西塔に至る、此所は雄壯の構ゐにして昨夜聞きし之れは西塔の側に住む武藏坊辨慶の乱暴なる傳說を思ひ踵を回して歸路に付き、今日の出所に近き根本中堂の案內を乞ひたり。案內の老僧、齒のぬけて言葉不明佛の前に坐せしめて緣起を說く二分時、藥師如來の前には「明らけく後の佛の御世までも光傳へよ法の燈火」の捧げられ

阿耨多羅三藐三菩提の佛たち
我立つ柚に冥加あらせ給へ

と此寺を傳敎の開きし昔に變らぬ光のはなつ、有がゐき說はあまた傳へられ、世に陰れなき大伽藍最澄の事蹟をはじめ延元帝の再度の行幸、僧兵の活動等、宗敎に政治に、戰乱に、我國史上に花々しく雄飛しかつて

我山は花の都の艮に
鬼ゐる門をふさくとそきく

慈鎭の云ひし如く王城守護の靈峯と傳へられ我家のためには所謂御本山と思へば何とはなしになつかし。案內の僧と別れいよ〳〵靈峰を下る、此度は道を無動寺にとりまだ晴れやぬ雲の中を羊腸たる山路に從ひ下りて、辨才天に參り疲れし足も詩人の後をしたへば、山路九町の迂回も物ならず裳立山なる紀貫之が奧津城を弔ひぬ、

延長九年從四位にて卒し、明治三十八年從二位を贈らる、

今古和歌集、萬葉集鈔　新選和歌集、貫之家集、土佐日記を後の世に殘し今尙歌仙の第一として

かき曇り黑白も知らぬ大空に
ありと星をば思ふべしやは

の詠歌は神の御心のあはれを得へしとさへ傳られ英名高きこの山に、石造の佛体渡忠秋の碑石に甘じて永久に眠りを托す、閑ならく師範學校よりは年々來り弔ひ楓樹を以てこの山に秋の錦を織り出し以て英靈を慰むとすと。今新道のそがれ、紀念碑さへ立てられたるも除幕式未だ不幸にしてそのくはしきを知るを得ざりき。山路下りつくせば村里に入る近江路に出づ雨は依然としていとゞ激し。道の半道も歩みけむ、唐崎の松の根に着したり。

百年をやたひおくりし神代より
ふりて久しき志賀の濱松

とや詠じけむ、舒明天皇の御代に琴御館宇志麿の愛でにし庭の姫小松、今は唐崎の老松と萬民に稱へられ幹の高さは三十尺、周圍二十七尺、東西に四十間、南北に四十有八間の枝をさゝふる杖は數ふべくもあらず、延々と繁する松の枝の幾千代かけての深みどりは、水の下なる唐崎明神の華表の紅に映じ、その風光美は

しき大湖にのぞむ、壯觀は實に天下獨特、只だ恨むらくは湖濱の泥洲年々堆積して岸頭の景、古の如く清からざると松の綠のやゝ衰微の眺あることなり。

さゝ浪や志賀の濱松朽とぬぞ
古き都の形見なりけり

松も昔の友ならば、誰をかも知る左馬助光春が單騎湖を渡りし物語をせむも、只だその音づれは松にことふ浦風に雲龍壽きし白練の羽織を飜し、二の谷の甲冑を載き健馬に鞭打ち白波蹴立々々此方をさして進み來る武者一騎、つひには此濱に乘り上げ松の下にて息あひの藥を飼ひやゝあつて、又馬に乘り阪本さして進み入り十王堂に手綱を繫ぎ矢立の硯とり出し「明智左馬之助湖水を渡せし馬なり」手取りかみに結び付け互に名殘を惜むと見わしが、つひに姿を失ひぬ。

時は雅れ姦雄の雄圖破れし、天正十年水無月光春は安土城を一炬の煙となし果てゝ粟津ヶ原に秀吉が先陣堀久太郎の軍に行あひ、味方破れて坂本城を氣づかび、一鞭高くかなたなる唐崎さして突込みし、松の操と諸共に末世に殘る譽れの美談。十王堂前に別れし名馬大鹿毛は後筑前守の愛馬となりて「曉」と名を改め立てし績の多かりしと。英雄の此擧や眞否は我の責任を負ふ所にあらず。

唐崎の松は花よりおぼろにて　芭蕉

時に午。友にもたよりして腹を肥す。大津までは一里足らずなるを「滋賀の都跡」たずねばやと松の濱を後に

近江路を右に從ひて、折りしも烈しく降り來る春雨に心せかれて、いそがずばぬれざらましを後よりはるゝ野路を愛馬膝栗毛に一鞭高く一村里に入る。先づ村人に訪へど答へるものとては無く、いぶかしながら問ひては行き、行きては問ふに誰とて敎ふる人ぞなき、あはれ滋賀の都もかくまで荒れにしかと今宵の宿なる瀨田まで尙遠く、時は午を過ぎ雨は降りしきるまゝに最早や斷念して春雨の中を右、京、左大津なる追分に來りぬ。

かゝる時大津の方より一婦人來かゝりければ、念のためにもと尋ぬれば、さだかにそれとは定めかねるも我歸途なれば案內仕らむと云ふ。盲龜の浮木、金龜男兒は勇みぬ。婦人は我妻の學生なると都のあはれを思ふとに、昨冬師範學校一年にして他界せし我子を忍びて語り草、繁る山路に入りてより五町、地藏堂あり、本尊は丈余の石像、婦人はぬかつき終りてよしある佛と語りぬ。尙登れば道傍に枯木のあり。即ち指して「之れは志賀の都の八重櫻にして、二三年前まであつたんやが、枯れたで切つてしまわつた」のさらに櫻に我子の事を忍ぶらむ。いよ〳〵進み行く二町にしてついに來る一丘岡、「この細道を登りなはい、妻は何が何やら知らんけれどナ、皆なが昔の建物の趾やと云うてます、大キナ〳〵石ガ幾ツもありますホン」此所に別れを告げ。名にし負ふ志賀の都の跡やいかにと丘上に上れば、巨石の數固荒草中に散在するのみ。雨は降り止まらず。しばし忙然と、心は空になりぬ。顧望徘回すれは裾に木標あり、筆の跡新しく「天智天皇創立崇福寺跡とあり「さてはさて！」